

京鹿子

平成二十七年五月一日発行
通巻一〇八九号(毎月一回一日発行)



5月号

豊田都峰
叡林集 その五



川すぢの光を散らす都鳥
日のかけらまきて橋越ゆ都鳥
梅東風の配りのこしのなき嵯峨路
遠嶺より晴れわたりみて野梅咲く
ひともとの野梅をおきて嵯峨も奥
嵯峨野なる風の均せる竹の秋

なで肩の愛宕嶺近く青き踏む
光彩のまんじくづしを初蝶とす
初蝶のこぼすがごとき日の粒子
磯あそび沖に雲消え生れ流る
百好きの百祝ひせん水仙忌
ものの芽の影もたしかな野のひと日
葦角組むとほくに伊吹置く湖は
寄す波のひとすぢにある葦の角



—近詠—

鈴鹿
仁

柳に芽

せせらぎも喝采のうち柳に芽

鷹鳩と化し弥次喜多の像は故_ふり

終章のひと日に充つる春夕焼

—追懐—(その九)

一升びんぽんと蓋あく水仙忌
〔平成五年作〕

花冷えて頸のあたりの油断あり
〔平成五年作〕



— 近 詠 —

和田 照海

捨て値

伊予の嶺に雲たむろして海鼠突
半端海鼠捨て値にされて糶をはる
火達磨となる煩惱のとんど餅
とんど餅めでたく焦げて落人村
忙中の閑もて余す日向ぼこ

秀華採集

池普請太閤の夢あらはにす

渡辺貞子

治世者はたいへん治水に心を尽くす。太閤も例にもれず「太閤堤」などに名を残している。水は必要であるが、暴れると、大変「池普請」に痕跡があったのだろうか、「太閤の夢」と捉えた点を評価したい。

戸籍なき初天神の皿小鉢

高木晶子

蘆芽吹く明日といふ字に日も月も

澤近栄子

前句の「戸籍なき」の措辞。後句の遊び心。俳句はいろいろと楽しんでもらえば表現の広がりにつながる。まさしく自由無礙の精神である。



神麓集

夕つばめ 藤岡 紫水
紅梅に触れて多感な風の私語
下萌えや蒼天を占む天守閣
光芒となりて春水落つ水車
満ち汐の川上り来て夕つばめ
啓蟄や深きにひそむ石の息

草の餅 松本 鷹根
苔衣常 寂光の春しぐれ
漣を沖に馴らして魴を挿す
片隅に草餅を売る湖ほとり
春雪嶺霽れて蓮如の行脚あり
草の餅血縁絶えて故郷あり

松田 都青
寒き夜は垂直思考バツハ聴く
雪螢飛んでゐるのはいつも過去
ゆづりはや清き敗者でゐる余生
死に方をじっくり見せて雪螢
靴音が凍りつく夜のマタイ伝

山茶花日和 北川 孝子
ひたむきの一語大事に寒椿
梅便り吾子も横書き世代かな
日本海窓に寄せ来る凍つる闇
人知れず己れを律す春浅き
身の廻り整へ山茶花日和かな

初春 丸井 巴水
節電の冬過ぎ赤き糸たぐる
眼鏡拭き一日を終へる寒の月
火葬炉へまだ半身は春の冷え
椿落ち古刹を照らす緋のむくろ
再会の抱擁しなやかな牡丹雪

笹舟 塩貝 朱千
日の神と師に合掌し冴返る
胆つめて今けいこ中追儼鬼
春の闇山を魔法で包みゆく
笹舟のじぐざぐ流れ春立つ日
人恋ふる彩を重ねてスエートピー



京鹿子集

豊田都峰選

池普請太閤の夢あらはにす

京都 渡辺 貞子

水掛くる佛像五基に淑氣満つ

節分のお化けが売り子五色豆

寒木瓜や想ひを包む小風呂敷

室の蘭百それぞれに貌を持つ

鬱溶かす待春の陽に恵みあり

アリゾナの餅つき大会四百人

アリゾナ 伊吹 之博

戸籍なき初天神の皿小鉢

高木 晶子

節分の誰かこの世の戸をたたく

雪の京大宮人の心馳せ

からうじて春へ転がるだるます

寒泳や腕組むコーチ米寿なり

オハイオ 水谷 直子

蓬餅もう私に戻れさう

雪の道滑らぬやうに塩を撒き

蘆芽吹く明日といふ字に日も月も

澤近 栄子

風を着る少女の像や春立ちぬ

冬の凧息とめ眺む銀の庭
真白なる根雪の反射空の青

何時までも居据わつてゐる風邪の神

札幌 野村 鞆枝

雪嶺に日は落ちゆきし遠目癖

一顧だにせぬ日もありて古曆
ほろ苦きことも人の世ごまめ囁む

雪まつり大きな靴の園児達

眼鏡拭くさびしき鬼や年の豆

むつかしき言葉は要らず春の雨

アドレスの削除躊躇ふ梅二月

短日や病院込みて急ぎ足

酒田 藤波 松山

冬の雲低くたれこめ田に降りぬ

山鳩の寄り来るにほひ春の闇

雪晴や下校の赤きランドセル

肩越しの孫の笑顔や初鏡

鴨三羽川面波立て泳ぎ居り

シクラメン飾り只今警邏中

豆まきは夫の厄を取り払ひ

渋川 東 秋茄子

わがペット猫の恋時なる二匹

水鏡柳ゆうらり親子鴨

亡き母は椿を好み帯柄にも

冬三日月胸突き坂に背を反らす
炉辺語りいぶされて聞く津軽弁

成人式の写真届く祖父のもと

さいたま 神田 惣介

名利を抱く冬山亡父母の声

臘梅の香の流れ暮るる門
賀状繰る会ひたい人の文字の癖

トルストイ手にして留守居置炬燵

小正月残り野菜の五目汁

父の歳越えて帰郷や初詣

稜線は刃のかたち斑雪
壁崖のいま瑞瑞し雪兎

泣き止みて手を振る孫や年の暮

習志野 上野 紫泉

一心に紅を育む寒牡丹

葬りなか風花にのり風に乗る
立春の満月鬼を消しながら

一枚の森の絵に蝶凍てて棲む

船橋 元橋 孝之

売れ残る伊勢海老の髭あかく撥ね

去年今年マグマの舌を海は呑む
糧にする竹釜を沈め夜のとばり

捉へどこなき煮凝りに刃を入れる

どちやう掘る鳶のするとき日は真下

スペインの塩ふりかけて七日粥

直江 裕子

一木より生れし弥陀佛実千両

ばらときてたちまちどつと初雀

金子 正道

寒紅の濃き唇のよくしやべる

復興はすなはち風化阪神忌

大寒や無言の妻をもてあます

活け直す千両の実の転がりて

年賀状来ぬ友を案じる二十日かな

裸木や小鳥の数多集ひ来て

羽子板の打つ音のして笑ふ顔

佳きことに出会へる予感初茜

初電話遠地の友の笑ひ声

初東風や野仏囲み木々をどる

観劇やちよつとお洒落なコート着

真心は蕊にひそめて寒牡丹

実朝忌鎌倉銀座かがよへり

白魚の涙の色をおどり喰ひ

空重く垂れて色増す犬ふぐり

松島や独眼拝す初日の出

ひそやかにほくむものあり冬木立

花一輪開きはしめる寒の底

甦へる記憶に遊ぶ春立つ日

春蘭の花は葉の色寂しき日

上社より下社に移る春の鳥

名のみとは言ふも春立つ明るさよ

戻れば石に寄り添ふつのは花

煮凝りや俄かに見えて来る故郷

柚子風呂や招き寄せるもまた離る

些かの含羞もあり年男

大書する筆に遅速や雪降り来

あめつちの光なないる霜柱

枯野原雨ひと粒のやはらかし

少年の瞳まつすぐ冬木の芽

湯豆腐や少し優しい話など

着膨れてラジオ体操朝ぼらけ

叶はない夢の数々春の雪

人の世の苦楽に限り露の臺

年の瀬の夢は夢なるジヤンボ籤

腰痛を逃げ口上に年の暮れ

歳末やアメ横慣れの夫は供

初詣子に手を繋かれて前進す

鈍行に乗りつぎ急ぐ去年今年

田作を噛むかむ乳歯フアソラシド

少しだけ尖る赤頬寒四郎
喪に服すテレビの中の鏡餅

高島正比古

中島悠美子

中村 三郎

岸上 道也

丹羽 武正

中西 明子

福島 照子

児玉 有希

神田美千留